

両下肢に注意を向ける課題を行い、麻痺側下肢の躓きが軽減した右片麻痺症例

○菅原 紘子<sup>1)</sup>

1) 函館稜北病院

### 【はじめに】

歩行中に麻痺側の躓きに気づかず、転倒しそうになる症例を経験することは多い。今回、両下肢に注意を向ける課題を行い、見守りで歩行可能となった症例について報告する。

### 【症例】

左脳梗塞を発症した60歳代男性。発症から2ヶ月で当院へ転院となった。失語症、注意機能低下があり、Br.stage下肢Ⅲ、感覚は軽～中等度低下していた。起居移乗動作は左側優位の動作で、立位では右下肢が浮いていた。歩行は支持機能では右膝関節過伸展、到達機能ではクリアランス低下があり、4点杖・SLBを使用した歩行訓練から開始した。歩行時は特に右下肢へ注意が向きづらく、振り出しが不十分でも前進しようとする為、介助が必要であった。転倒しそうになったことは分かるが、どうして転倒しそうになったかを認識することは難しかった。簡単な接触・空間課題は認識可能で、注意が持続する範囲であれば、気づくと動作の修正が可能であった。TUGは4点杖歩行で28.44秒だった。

### 【病態解釈】

外部環境や左上下肢へ注意が向くと、右上下肢への注意の分配が困難であった。さらに起居移乗動作では左側優位な動作を反復しており、より左側優位の情報構築が強化され、右側へ注意をむけることが困難になっていたと考える。歩行における両足の関係性の再構築が必要と考えた。

### 【訓練・結果】

足型のイラストを提示し、足部の位置を問う課題。日常生活への汎化も考慮し、右下肢の位置をランダムに接地し、立ちやすい位置へ修正を行う課題を実施した。この課題後、膝関節までは認識可能となり、自発的に右下肢の位置を修正する頻度が増加した。その後、下肢で図形を描き図形を認識する課題、スペーサーの高さを認識する課題を行った。課題の解答時間の短縮に伴い、右下肢の躓きの軽減を認め、さらに気づいて自制できる頻度も向上した。歩行中に右足が分からなくなることは減ったと記述があり、介入約1ヵ月半で病棟への歩行導入が可能となった。最終的にはTUGは1本杖歩行で18.68秒となり、病棟では見守り歩行、人の少ない環境では自立歩行が可能となった。

### 【考察】

右下肢だけでなく、両下肢に注意をむける課題を行ったことで、両下肢へ注意を分配することが可能となり、右下肢の躓きが軽減したと考える。内部観察の検証や、客観的な評価が不十分な所は今後の課題としたい。

### 【倫理的配慮】

本発表に対し、症例に対して説明し同意を得ている。